

〔二折裏（↓本来二折表）〕

| | |
|----------|----|
| 籬のはに風も | 心敬 |
| 音する冬の空 | 心敬 |
| たなひく雲や | |
| まよひ行らん | 日明 |
| 夕立の晴ぬる | |
| あとは涼しくて | 貞興 |
| ひかけもなつの | |
| 山のへの露 | 有実 |
| 氷室もり宮こに | |
| いつる道すから | 忠英 |
| とへは名にさへ | |
| たかつなる里 | 利在 |
| またしらぬ旅に | |
| 石見の国もうし | 立承 |
| つまこふ袖も | |
| 海となりけり | 隆蓮 |
| 忍びぬるこゝろの | |
| 底はちひろにて | 伝芳 |
| なきかかたみの | |

竹のひとむら 心敬

| | |
|------------|----|
| 朝かほはあした | |
| のほとや開にけん三位 | |
| うつろひやすき | |
| 秋のひのいろ | 円秀 |
| ほしかぬる衣は | |
| いかてうちてまし毘親 | |
| 露もりあかす | |
| 草のかり庵 | 正頼 |

〔三折表〕

| | |
|----------|----|
| 鳥も居ぬ古畑 | |
| 山の木はかれて | 心敬 |
| 雲の枝より | |
| 雪そうちゝる | 円秀 |
| 月さむし桂に | |
| 風やしほるらむ | 利在 |
| とをき川原を | |
| ふけて行比 | 伝芳 |
| うからめや妹かり | |

いそく夜半の空 隆蓮

| | |
|----------|----|
| まつ人なしと | |
| 門やさらまし | 有実 |
| 憑つる花も杉立 | |
| みねの庵 | 心敬 |
| いつかは春に | |
| あふ坂の山 | 忠英 |
| うくひすも老ぬる | |
| 聲はあはれにて | 円秀 |
| わか身のうへを | |
| わふるとはしれ | 三位 |
| 残るさへはかなき | |
| 野への草の露 | 正頼 |
| やとりし月も | |
| むなし明ほの | 有実 |
| 夢かへるかりねの | |
| 床の秋の風 | 隆蓮 |
| 舟にきく夜の | |
| 波はすさまじ | 毘親 |

〔三折裏〕

如何なれや縄たく

海士のぬれ衣 利在

恋路もひなの

なちをそ行 心敬

忍ぶ中よそに

しらぬを便にて 忠英

(二行あき)

とにかくになみた

ひまなき夕ま暮 日明

松に風ふき

猿のなく山 心敬

捨身は木かけ

岩かね宿として 毘親

むかふもきよく

水にすむ月 伝芳

秋かけてあしろを

まもる川の瀬に 利在

うす霧しろき

田上の郷 立承

衣手にあさけの

霜やまよふらん 隆蓮

みち行人の

わくる冬の野 円秀

枯てたに草ヤブ

色もかくろはて 伝芳

こゝろのたねそ

さまざまにある 有実

〔名残折表〕

さらは又うらみも

はてぬ物おもひ 立承

かすむもかなし

しのふ夜の月 心敬

春のきてなに、

涙のおちぬらむ 伝芳

身をしる人は

のとかにもなし 毘親

世の中をあすと

憑むはおろかにて心敬

ひかりのかけを

をしみとめはや 有実

暮わたる窓より

をちに飛螢 隆蓮

秋風ふくと

竹そそよめく 利在

うちなひくその、

柳のちりそめて 三位

かよへは露の

きゆる道の邊 正頼

さを鹿や山の

ふもとを出ぬらむ貞興

田をもるこゑそ

月にきこゆる 毘親

さ夜ふかき湊の

舟に人はねて 心敬

ひとりある身の

あし火たく影 伝芳

〔名残折裏〕

わつかなる栖を

なとか憑むらむ 円秀

軒の木すゑに

巢をかくる鳥 三位

開花も去年や

わすれぬ山さくら利在

かすみをこゆる

風のしつけさ 伝芳

うちいつる浪に

氷のひまみえて 隆蓮

われてもくたる

朝川の月 忠英

秋をへむ君か

宮木のかすくくに心敬

うてなの露の

玉みかく也 日明

御一句

本能寺

日明五

有実七

心敬十四

忠英六

半井

三位七

貞興六

本能寺日守

隆蓮九

伝芳十

毘親八

承成一

利在九

立承六

円秀七

正頼四

『落葉百韻』についで

一 『落葉百韻』

『落葉百韻』は、某年十月廿五日に、本能寺第四世日明のもとで、心敬を宗匠に迎え、一条兼良の発句を拝領して張行された連歌である。この百韻は、後人の書写である卷子本仕立ての写本が本能寺に存在する。この卷子本は、『本能寺宝物古器物古文書取調帳』（明治十二年^{（注1）}）の記録には、「発句 紙地 一卷 一条大関十月廿五日筆、元和六庚申三月十五日 寄附主日嘉」と記されており、元和六年（二六二〇）に日嘉上人により寄附されたと伝えられてきている。該本は孤本であり、昭和三五年、桃井観城氏の論文「金剛院日與上人について」（『桂林学叢』第一号・昭和三

五・四) によって、はじめて考察がなされている。さらに同氏の監修による『本能寺』(昭和四六・本能寺) に写真が掲載されたことが契機となつて、昭和五五年に影印が、収載に際して調査にあつた金子金治郎氏の解説と共に『連歌貴重文献集成 第四集』(昭和五五・勉誠社) に収められ、現在に至つてゐる。百韻の名称に関しては、桃井氏論文で、卷子本が本能寺において「落葉集」と称されていることが述べられており、この名は一条兼良の発句「木の本能寺井にたまる落葉かな」にちなんだものという(『本能寺』(昭和四六・本能寺))。この名を受け、百韻形式であることから、金子氏が『連歌貴重文献集成 第四集』解説において「落葉百韻」と呼び、以来こう称されている。この百韻に関する書誌的な解説は、別稿『落葉百韻訳注』の該当箇所にて記しており、翻刻と共に適宜参照を願うこととして、ここでは、『落葉百韻』をめぐる文化的な状況に目を向けつつ、百韻の検討を試みたい。

二 『落葉百韻』連衆

『落葉百韻』の連衆は十五人であり、以下に各人の紹介を記す(括弧内には出句数を示す)。

一条兼良(発句のみ) 応永九年(一四〇二)〜文明十三年(一四八一)。永享四年(一四三二)撰政・氏長者、文安三年(一四四六)太政大臣、文安四年(一四四七)関白、享徳三年(一四五三)准三宮となり、文明五年(一四七三)に出家。位人臣を極めたのみならず、当代一流の文化人として諸学に通じるとともに、『新統古今集』の両序、『草根集』、『竹林抄』などの家集、句集の序文を草し、連歌論書『連歌初学抄』、寄合書『連珠合璧集』も著す等和歌・連歌の碩学でもあった。

日明(亭主・五句) 生年未詳(文明六年(一四七四))。本能寺四世。康正二年(一四五六)に本能寺貫主となる。日与と共に『本妙寺本能寺両寺法度』などを定め、門流の組織化に尽力した。本百韻では脇と挙句を詠む。日明の連歌等の文学的な事蹟は、この百韻の他には管見に入らない。

心敬（宗匠・一四句） 応永三年（一四〇六）～文明七年（一四七五）。京都東山の清水坂南に存した十住心院住持。権大僧都。十住心院は室町幕府の祈願寺であり、管領畠山氏の氏寺ともいべき位置にある寺（真言宗）であった。心敬自身は比叡山横川で修行している。和歌を正徹に学んだ冷泉派歌人であり、畠山の一族である能登守護畠山賢良の歌会にしばしば参加。連歌作者としても活躍。応仁の乱以降、晩年は関東に下向し、都には戻らなかった。

三位（半井と句上に注記・七句） 半井明茂。応永九年（一四〇二）～文明十五年（一四八三）。宝徳三年（一四五二）従三位、享徳三年（一四五四）正三位、応仁元年（一四六七）には従二位。歌人の堯孝、正徹らが半井家に出入しており、和歌に熱心である。また宗伊の『諸家月次連歌抄』（文明十一年から十三年の諸所の連歌会での記録）を見ると、しばしば宗伊らと同席しており、連歌の好士でもあった。

隆蓮（本能寺日与と句上に注記・九句） 注記によれば、本能寺六世日与。日号を名乗る前の名であろう。↓日与毘親（八句） 伊丹領主撰津氏の一族か。正徹、心敬、正広らと同席。正広と親しい。

利在（九句） 『文明九年正月廿二日何船百韻』で、日与、日顕らと同席。

円秀（七句） 清水寺平等坊僧。正徹と懇意。

有実（七句） 未詳。

忠英（六句） 畠山氏の被官、井上氏か。井上統英の父、総英の祖父かとされる。従と能登守護一族畠山賢良の主催する和歌会に出詠。正徹の弟子。

貞興（六句） 未詳。

伝芳（一〇句） 後に紹芳と改名。正徹門弟、東福寺禅僧。自句に心敬の加点を依頼し、連歌指導を受けている。

承成（二句、執筆） 未詳。

立承（六句） 畠山氏の被官、能登での畠山義統主催歌会、連歌などに参加。『文明九年正月廿二日何船百韻』で、日与、日顕らと同席。

正頼（四句）享徳、康正年間に正徹、心敬、正広らと和歌、連歌に同席している。正徹周辺の人物、あるいは僧か。※日与 本能寺六世権大僧都日与。応永三十三年（一四二六）出生、延徳三年（一四九二）没。寛正六年（一四六五）本興寺に入山、文明六年（一四七四）には本能寺に入山して、両山を兼務した。「博学多才」な「両山中興」と称された（『両山歴譜（日唱本）』^{注3}）人物であった。和歌や連歌をよくし、『新撰菟玖波集』に十二句入集。参加の判明している百韻に、文明九年（一四七七）正月廿二日、杉美作守重道陣所にての何路百韻（日与と日顕参加）、文明十五年（一四八三）三月二日、本能寺にての何路百韻（日与と日顕参加）があり、延徳二年（一四九〇）閏八月には、本能寺の自坊で、同一の前句に肖柏、基佐、宗長、玄清、宗作と自らの六人が付けた付句の優劣を論じ、後に宗祇に加點、注を依頼し、宗祇句も加えた『七人付句判詞』を作らせている。また、『落葉百韻』の兼良の発句を立句として、法華文連歌を独吟し（年時不明）、延徳二年（一四九〇）には『法華和語記』^{注4}を著作している。この『法華和語記』は「法華経をテーマとする釈教歌作成の手引書としての性格を強く有する」とされており、日与においては、信仰と作歌、作句の融合がなされており、それゆえに連歌師を招いての歌会の開催や連歌の張行も盛んになしたであろうことがうかがわれる。

連衆の中には、経歴未詳の者も存在するが、正徹と関係の深い畠山氏の被官の武士たちや僧の集まりとみなしてよいであろう。本能寺住持日明の主催で、何らかの祝言の意を込めて一条兼良の発句を拝受した格式のある会で、畠山氏、正徹に關係の深い心敬が宗匠に招かれ、連歌に心を寄せる隆蓮（日与）も参加を許された会であった。

三 『落葉百韻』成立時期

現存するこの百韻の卷子本には、張行年月日がなく、成立時期に関しては、先行研究で推定がなされている。はやと桃井観城氏によって、文正元年（一四六六）十月廿五日と推定がなされた。^{注5}平成十四年に他見不許可の貴重書であつ

た『両山歴譜 日唱本』が『本能寺史料 古記録篇』に収載され、その文正元年の項を見ると、「十月十五日」の記述に続いて

一条太閤兼良公於当寺発句

木ノ本能寺イニタマル落葉哉

コモトノテラ
フリヌル(底)ニサユル松風 本能寺第四世 日明

と記述がある。それゆえ、桃井氏の推定は『両山歴譜 日唱本』の記述からと思われ、以後の本能寺の出版物もまたこの推定に依っている。だが、『両山歴譜 日唱本』では、続いて「又円光院坊ニテ宗祇発句 ノボル水アリテヤ氷ル空ノ月」と記されており、この句は、宗祇が文明十八年十二月二十二日の本能寺での連歌のために作った発句であることが、宗祇連歌研究の進展により現在判明している。このことから、おそらく文正元年の箇所（注7）の記述は、その年になされた連歌を載せたというのではなく、前年に本興寺第五世日禎上人が亡くなって日与が第六世となり、日与の事蹟の記述が続いて行く中で、特にとりあげておきたい重要な連歌の発句を書き留めておいたものではないかと思われる。また、『落葉百韻』の中で、心敬が詠んだ「櫛のはに風も音する冬の空」「いにしへを忘れぬ山の夜の雨」の二句が、文正元年四月の成立である『心玉集』に入れられている（注8）。従って、『落葉百韻』の張行時期は、文正元年の前年の寛正六年十月二十五日が下限となる。

続いて、金子金治郎氏が、『連歌貴重文献集成第四集』の解説において張行時期の推定をなしており、『法華宗年表』（注9）の以下の事項

康正二年（一四五六） 日明、本能寺貴主となる

寛正五年（一四六四）二月 日隆、入滅

寛正六年（一四六五）二月 日禎、入滅、日与が本興寺貴主となる。

により、宗門の大事を勘案して、百韻興行の下限を「寛正三年（一四六二）まで遡るべきかと思う」と考えられている

る。さらに、氏は、「上限を康正二年から二、三年下げて長祿二年（二四五八）とすれば、百韻興行の時期は、一四五八〜一四六二の五年の間の、いずれかの年となるう」とされる。加えて、長祿四年の一条兼良の法華経講説に対する感状の存在を、百韻の発句を請う機縁と考えられ、それによって長祿四年（改元寛正元年）を「百韻成立の可能性のもっとも濃い年」と、「推測である」と断られながらも、論じられた。氏の言う兼良の感状とは、『本能寺宝物古器物古文書取調帳』に「書状 一通 一条兼良公長祿龍集上章執徐杜月日書、当山日定二贈ラル」と記録された書状であり、その内容は左記の通りである。

本能教寺必芻日定講説法華要品最以本門之所詮為宗、以末世之弘通為先、厥利寔莫大焉、其志寧不嘉耶

長祿龍集上章執徐杜月 日

桃叟 朱印

兼良は、本能寺の僧日定の法華経の講説を賞賛しており、この書状の日定は、『両山歴譜』で日与と推定されている。例えば、日唱本では全六冊のうち第一冊に

寛正元年改元庚辰、師七十六

未入院、金剛院ノ時三十一歳ト見タリ

日与上人為一条太閤兼良、講談法華経之内要品、其称

題曰

本能教寺必芻日定本替爾也講説法華要品最以本門之所詮、為

宗以末世弘通、為先厥利、寔莫大焉、其志寧不嘉耶

四年也長祿龍集上章吳庚辰名執除吳名

杜月 日 桃叟朱印

蓋初日定ト云歟、未審

という記述があり、感状を写し、「日定」の部分、「本昏爾也」と書き添える。「蓋初日定ト云歟、未審」からも日唱が「日定」が「日与」であるという確証がもてなかったことがわかる。日唱本第二冊の長祿三年の項には「本能寺比丘金剛院日定後改受為一条禅閣請、講要品、即桃叟公之称美記有本能寺」とあり、日唱本とほぼ同時期に本興寺で記された日心本には「第六祖日与上人、為本興寺貴首、金剛院ト号ス始ハ云日定歟、一条兼良」とある。やや確信が持てないながら「両山歴譜」を記述する中で、日定が日与の前名とされていったのであろう。兼良に法華経の講説をするのであるから、日定は本能寺の中でも学識の高い僧であろう。それゆえ、「博学多才兼作文、好和歌」である日与と重なる部分は多く、以後日与と受け取られてきたのも納得できる部分があるが、やはりこれだけからは、日定が日与の前名とは断定はできかね、「法華宗年表」で長祿三年の法華経講説注1、同四年の兼良感状と列挙される事項と『落葉百韻』張行の関連もつけにくく思われる。新たな史料の発見がのぞまれるところである。また、日定と名のる日与が、兼良の感状をもらった後に『落葉百韻』に参加したならば、日号を名乗る以前の隆運という名で出詠はしないのではなからうか。

なお、日与は、『落葉百韻』の兼良の発句を立句として、法華要文連歌を詠んでいる注2。兼良の句に自句を九十九句つける様から見て、『落葉百韻』と関連が深いと思われるが、その成立年時は不明であり、『落葉百韻』張行時期と関係づけることはできない。

このように見てくるとやはり、史料の少なさから、『落葉百韻』の成立年時を決定するには至らず、成立時期は、日明上人が本能寺貫主となる康正二年（一四五六）以後、寛正六年（一四六五）までの時期と、十年の幅を取っての推定になる。ただ、こうした結論に至るに際しては、『両山歴譜』を活字史料として読み、考究しえたことが大きく、それは故赤田日崇猊下のご決断による『本能寺史料』への『両山歴譜』（日唱本、日心本）の収載に依るものである。寺外の研究者への史料公開が、中世日本の文化史上、法華宗寺院の果たした役割の解明の糸口となるゆえ、『両山歴譜』の収載は実に意義あることであった。

四 「落葉百韻」と本能寺

それでは、この百韻の興行趣旨はどのようなものが考えられるのであろうか。

まず、兼良の発句の存在であるが、前関白(享徳二年(一四五三)に関白を辞している)一条兼良の発句をもちょうことは、本能寺にとりおそらくめつたにない機会であったことは、この百韻がわざわざ『両山歴譜』に記され、かつ現代に至るまで保存されていること、また、日与が、兼良の発句を用いて法華要文連歌をつくっていることからわかる。さらに、この句「木の本能寺井にたまる落葉哉」には、「本能寺」が詠みこまれている。発句に込められた祝意は、しばしば名称に表現されるものであり、例えば、『文明八年四月二十三日何船百韻』の発句「ことの葉の種や玉さくふかみぐさ」(管領畠山政長作)は、宗祇の草庵「種玉庵」が詠みこまれており、新造した草庵開きの祝いの発句である。こうした例からも、兼良の発句に「本能寺」を入れていることは、当事者にはわかる何らかの本能寺発展のさまが祝われているのではあるまいか。さらに発句には「本能寺」に「井」が詠まれ、本能寺の井戸における冬の情景となっている。発句には眼前の情景をとという約束事を鑑みれば、新しい井戸の完成といったような行事を推定できようか。^(注13)

ここで、本能寺の所在地に目を向ければ、本能寺は、応永二十二年(一四一五)、高辻油小路と五条坊門(現仏光寺通)の間に日隆が建立した本応寺に始まる。応永二十五年(一四一八)、日隆は妙本寺の月明と争い、本応寺を破却されて河内に移り、応永二十七年(一四二〇)に尼崎に本興寺をひらいた。その後、永享元年(一四二九)に本応寺を再建し、永享五年(一四三三)に信徒如意王丸が寄進した地に移り、名を本能寺と改めた。その所在地は「自六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西」の方四町の敷地(ただし六角大宮の非人風呂の地は除く)であり、落葉百韻が張行された時期の本能寺の所在地は、この地と考えられる。(図1「中昔京師地図」(国際日本文化研究センター所蔵)「初本能寺ノ舊地」)

『本能寺文書』によれば、この土地は、西坊城言長が康暦元年（一三七九）に妙峯寺に寄進し、その後、東岩藏寺に所有が移ったものを、永享五年四月二日に如意王丸という人物が買い取り、日隆に寄進したものである。もともとは西坊城家の土地であったため、文安年間には西坊城家と本能寺の間で所有権をめぐる争いが起こり、享徳二年（一四五二）から長祿四年（一四六〇）までは西坊城家に押領され、寛正六年（一四六五）に本能寺に敷地安堵がなされた。文明十八年（一四八六）にも西坊城家との紛争が再発するが、これも本能寺に安堵がなされた。

後に、天文五年（一五三六）の天文法華の乱により、本能寺は京を逃れて堺に移り、天文十一年閏三月十六日以前に帰洛している。その際には、「六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西の方四町の敷地」である旧領を安堵し、「六角与四条坊門、油小路西洞院中間、方四町」を新たに得た。（図1「本能寺地」。京都市埋蔵文化財研究所による二〇〇三年の調査で北が六角、西が油小路、東が西洞院、南が四条坊門に囲まれた一町規模に寺が存在したと推定されている。この

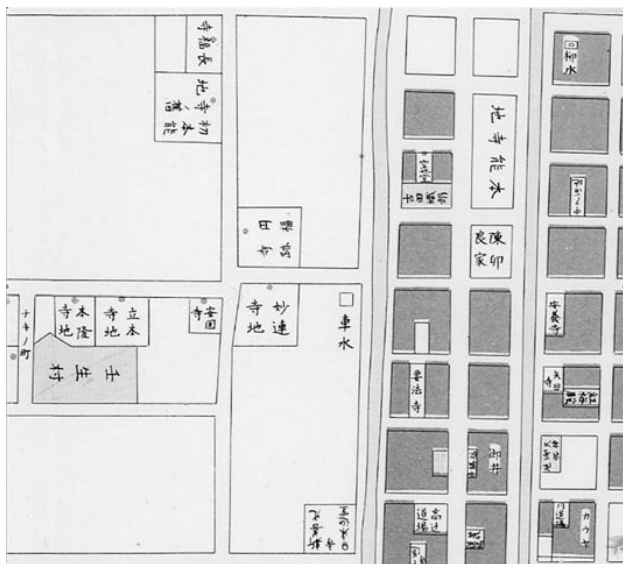


図1 中昔京師地図（部分）
中央を堀川が流れ、右上に柳水が見える。

地に再建された本能寺は、元亀元年（一五七〇）十二月から織田信長の定宿となり、天正十年（一五八二）六月二日の本能寺の変により焼失した。後、天正十七年（一五八九）までに同地に再建されたが、秀吉の寺社移転政策により、天正十八年（一五九〇）に、京極通東、押小路より姉小路に至る南北百四十五間、東西七十間の地に移転し、現在に至る。

さて、以上見てきたように、本能寺の前身本応寺の最初の所在地は、五条坊門西洞院南西類にあった法華信徒柳酒屋の近傍であり、良質の湧水の存在が考えられる。天文法華の乱後に本能寺が帰洛した「六角与四条坊門、油小路西洞院中間、方四町」の地も、本応寺のあった場所のまっすぐ北方に位置し、後に『雍州府志』が述べるように、柳の水が有名であった。すなわち両寺は北から南へと伏流する水脈の上に位置しており、『落葉百韻』張行時の本能寺もまた近隣に存在する。さらに、『落葉百韻』張行時の本能寺の方四町の敷地「自六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西」の一角（敷地には含めない）には非人風呂があったことがわかっており、湧水の存在が想定できる。寺の土地を定める場合に井戸の重要性は論を待たないことから、本能寺はよい水の湧く名水の井戸を持っていたのであろう。

なお、後に文明十八年（一四八六）十二月二十二日、本能寺円光院での連歌会開催にあたって、宗祇が発句「のぼる水ありてやこぼる空の月」を詠み送っている。この句は、「さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける」（古今集・春下・八九・紀貫之^{注19}）で有名な「水なき空」の語を使って冬の月の様を詠む「冬の夜の深けてさえたる月影ぞ水なき空の氷なりける」（嘉元百首・冬月・一七五〇・法性寺為信^{注20}）の発想から詠まれていよう。宗祇は、水なき空にも「のぼる水」と奇抜な表現を使った句作を「五文字以外左道なりといへども、ありてやと則うけたる所にてゆるさるべきにや」（『実隆公記』）と説明している。こうした発句の表現も、関係者ならよく知る著名な湧き水があった可能性を思わせよう。

五 法華宗寺院における文芸

最後に、法華宗寺院と、『落葉百韻』で宗匠をつとめた心敬、また心敬周辺の歌人、連歌師の関わりを見ておく。心敬その人に關しては、在京時の法華宗寺院での和歌、連歌の記録は、この『落葉百韻』以外は管見に入らないが、彼が応仁元年（一四六七）に東国に下向した際、武藏国品川での旅宿は、日蓮宗妙満寺の末寺である、太田氏被官鈴木長敏一族ゆかりの品川妙国寺にあつたのではないかとされている。^(注21)『落葉百韻』では、畠山氏との関係から本能寺に宗匠として招かれたのであろうが、そうしたつながりが、関東下向に際しての、法華宗の有力な檀那の一族の者からの庇護を生んでいったことになろう。なお、永青文庫本『手鑑』中の、心敬の句集の切と推定される一葉では、発句「朝しほは楸風ふく浜辺かな」に「同於妙国寺」と詞書が記されており、^(注22)関東の法華宗寺院での連歌参加が思われる。心敬の和歌の師、正徹は、妙行寺の日宝上人、後には宝舜上人との交流があるほか、妙蓮寺にも訪れている。妙行寺の法華談義は応永末年から著名であつたようだが、^(注23)長年にわたり上人の坊で正徹も参加して歌会が行なわれ、そこで畠山賢良と同席していた。畠山氏が妙行寺とも交流があり、法華宗寺院の複数と関わっていたことがわかる。以下、『草根集』日次本等の詞書の記述を挙げておく（人名には必要に応じ私に注を付した）。

永享二年一月五日 年ごとの事にて、妙行寺日宝上人草庵にきたられし

永享六年一月四日 妙行寺^(マゴ)まかるとて人のありきを見るに

同 五月十二日 妙行寺にて、阿波守（畠山義忠、法名賢良）、大膳大夫入道（赤松性具）など十五首の歌よ

まれしに、まかりあひて、短冊をたびたりしにかきつけし

宝徳元年七月廿二日 招月庵、妙行寺辺に暫旅所有しに、たづねまかりて（『東野州聞書』^(注25)）

宝徳二年二月十八日 妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）などをはせし次とて、続歌ありし

同 三月十五日 妙行寺にて続歌ありし

同 九月二十五日妙蓮寺といふ所にて続歌ありし

宝徳三年八月十一日 妙行寺日宝上人の坊にて、人々歌よみしに

享徳二年二月廿七日 妙行寺日宝上人の坊にて続歌ありし

享徳三年三月廿七日 妙行寺にて続歌ありし

長祿元年四月八日 妙行寺住持宝舜、修理大夫（畠山賢良）請待ありし次に、一座ありしに

長祿二年四月四日 妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）おはして、続歌ありし

長祿三年三月二十四日妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）おはして、続歌ありし

心敬の後を継ぎ、招月庵を継承した正広になると、本能寺日頭、日与の坊で歌合を行なっているのをはじめ、和歌の才を買われて、多くの法華宗寺院での歌合、歌合に出かけている。以下、『松下集』の詞書の記述を示す。（注26）

文明十三年 同秋ごろ、本能寺の円蔵坊日頭の坊にて三首歌合ありしに

長享二年五月廿九日 本国寺住持日円、堺の末寺成就寺へ下られ侍るに見参し、短冊を出し、一首所望有るに

長享三年三月二日 六条堀川に本国寺といふ法花堂（注27）行き侍るに、三十首続歌中に

同 三日 同寺にて続歌ありしにむかし伊豆の海にて、網士の釈迦仏を引きいだし日蓮にいだす、その

尺迦彼本国寺にまします、御戸開拝したてまつるに、短冊を出し一首と有るに、いなみがたくてよみ侍る

同 九日 頂妙寺日祝住持のすすめにて一座ありしに

同 廿二日 壬生念仏に人人さそはれてまゐり、帰るさに妙蓮寺住持の坊にて一座中に

同 九月六日 妙蓮寺住持坊にて三首歌合に

同 廿八日 本能寺住持日与の坊にて三首歌合に

同 九月尽 頂妙寺住持日祝の坊にて歌合に

延徳二年七月二九日 妙満寺末寺顕本寺とて一乘にあり、其住僧観行房、もとみし福富実増法師と云ふ者の孫なり、いにしへなれにし事などかたり出し侍る次に、一統すすめし中に

延徳三年五月九日 頂妙寺日祝より題目経一部短冊に歌を書きて、追善とておくられしに（注 正徹三十三回忌）
明心二年四月六日 浦上美作守則宗、是も御動座につき、泉州堺正法寺と云ふ寺にありし草庵へ尋ね侍るに、杯の次に一首と所望あるに、任筆はべる

同 九日 美作守則宗正法寺にて一座興行ありし中に

次いで、宗祇となると、百韻その他現存資料により判明する事蹟は多くはないが、本能寺における和歌、連歌それぞれの会に参加している。

文明九年正月廿二日 何船百韻（「杉美作入道もとにて侍し会に」〔宇良葉^{注27}〕）。発句「風ふかぬ世になまたれそ春の花」〔宗祇〕。連衆日与、日顕、大内政弘、利在、立承等（天理本その他）。

同十八年十二月廿二日 今日於本能寺有連哥、宗祇法師発句遣之「のほる水ありてやこほる空の月」〔実隆公記〕
延徳二年閏八月 本能寺日与坊にて、日与、肖柏、基佐、宗長、玄清、宗作の句を批評、日与に頼まれ、この

頃に加點。後に自句を加え「七人付句判詞」に注した（「七人付句判詞」跋^{注28}）

某年 本能寺日誉法印坊にて、同じ心（眺雁）を（宗祇集）

某年 本能寺にて、宗匠わたり給ひし時の会に、旅宿（宗祇集）

宗伊においても、宗祇同様、本能寺等で連歌をしていることがわかっており、彼の『諸家月次連歌抄』には、妙蓮寺の日応僧正の名が見える。

文明十二年四月六日 今日、於妙連寺^通五条坊門、大有連歌會（「長興宿禰記」^{注30}）

文明十五年三月二日 何路百韻（於本能寺）。発句「山かぜに花の音する句かな」（宗伊）。連衆日与、日顕等（天理本その他）。

こうした交際の様子から、本国寺、妙蓮寺、本能寺のような京都における有力な法華宗寺院において、しばしば歌会、連歌会がもたれ、著名な歌人、連歌師が参集したさまがうかがえる。さらに、応仁の乱前後の京都の法華宗寺院は、公家との関係も急速に深めている。^{注31}例えば、妙蓮寺には庭田重有の子である日応が住持として入寺したが、これによって、妙蓮寺へは、皇族、公家、武家の往来が頻繁となり、談義の聴聞、歌合の開催等の記録が残っている。^{注32}また、近衛房嗣・政家父子、花山院政長などが法華宗に入信しはじめ、頂妙寺の住持日祝や、本国寺住持日暁を近衛政家が訪れている。そうした中、本能寺は、文芸に積極的な住持日与の下、武家との関わりも強め、將軍家祈禱所ともなっていた。^{注33}法華宗寺院には、住持たちを中心とし、貴顕や武士らが歌会、連歌会につどう文芸サロンが寺ごとに発達し、本能寺もその一翼を担っていたのであった。

『落葉百韻』は、本能寺の文化史においては、日与の文芸サロンの萌芽が見える時期の催しであり、いわばその揺籃期を告げる催しであった。そして、心敬研究の観点においては、張行場所、連衆から、応仁の乱以前の京都で、心敬がつながりを持った法華宗寺院文化圏の一端が見えてくる、貴重な百韻と言えよう。

注

〔注1〕藤井学・波多野郁夫編『本能寺史料 古記録編』（平成一四・思文閣出版）。

〔注2〕米原正義『戦国武士と文芸の研究』（昭和五一・桜楓社）。

〔注3〕注1に同じ。

〔注4〕糸久宝賢「本興寺・本能寺 両山六世金剛院日与とその周辺」（初出一九八四『大崎学報』、『京都日蓮教団門流史の研究』（一九九〇・平楽寺書店））。

〔注5〕桃井観城「金剛院日與上人について」（『桂林学叢』第一号、昭和三五・四）。

〔注6〕桃井氏の見解は、桃井観城監修『本能寺』（昭和四六・本能寺、藤井学・波多野郁夫監修『法華宗大本山本能寺』（二〇〇二・本能寺）にも受け継がれている。また、『法華宗大本山本能寺』は、解説で成立の月日を「十月十五日」としており、この点で明らかに『両山歴譜』に依っていることがわかる。

〔注7〕『実隆公記』文明十八年十二月廿二日条に「宗祇法師來話」又今日於本能寺有連哥、宗祇法師発句遣之、のほる水ありてやこほる空の月」とある。『実隆公記』の引用は『実隆公記』卷一下（一九七九・統群書類従完成会）により、必要に応じ清濁を付した。

〔注8〕金子金治郎編『連歌貴重文献集成第四卷』（昭和五五・勉誠社）金子氏による解説で指摘されている。

〔注9〕『法華宗年表』（昭和四七・法華宗（本門流）宗務院）。

〔注10〕注1に同じ。

〔注11〕『法華宗年表』で長祿三年に「金剛院日与（初日定）関白一条兼良公の為に法華経要品を講ず（両譜）」とあるのは、『両山歴譜』この部分からか。『両山歴譜』日唱本は、手稿本であり、浄書されていないため、たいそう難解だが、『本能寺史料』の翻刻を見ると、この項目に関しては、頭右上におそらく項目の順序を示す「四」の文字があり（一）は、長祿三年の年号、「二」は同年六月十八日の日登上人遷化の記事、「三」は寛正元年の年号に付されている、それに従えば寛正元年に入るべき項目となる。

〔注12〕和歌山市和中文庫に日与の法華要文連歌が所蔵されており、高木豊氏による本文の翻刻がなされている。高木豊「法華要文連歌小考——法華経和歌との関連と対比——」（『浅井円道先生古希記念論文集 日蓮教学の諸問題』（一九九七・平楽寺書店））。

〔注13〕金子金治郎氏は、『連歌貴重文献集成 第四集』解説において、巻首、巻尾の発句、脇、九十九句目、挙句を検討され「おそらく本能寺の基礎が固まり、さらに発展することを願ったもので、増改築のごとき事業に際しての祈禱連歌であつたらう。」と考えられている。

〔注14〕例えば『日蓮宗宗学全書第二十卷』（昭和三五・日蓮宗宗学全書刊行会）におさめられた『本能寺文書一』に存する「宝徳二年十一月廿八日付畠山持国奉書」には、「六角大宮本能寺敷地六角以南四条坊門以北櫛笥以东大宮以西四町々但除六角面非人風呂敷地」とある。なお、本能寺の敷地に関しては、糸久宝賢『京都日蓮教団門流史の研究』（一九九〇・平楽寺書店）に詳しい。

〔注15〕『本能寺文書一』所収「康暦元年十二月廿三日付西城城言長寄進状」に「寄進妙峯寺 六角以南 四条坊門以北 櫛笥以东 大宮以西 方四町敷地事 右敷地永代奉寄当寺道の上人、且被成勅裁之上者不レ有相違ニ之状、如レ件」と記されている。

〔注16〕『本能寺文書二』所収「康永十四年正月十八日付付幡堂執行寛勝売券一」に「売渡申新定二券文二事 六角以南 四条坊門以北 櫛笥以东 大宮以西 方四町敷地事 右敷地者、依レ有所用一直銭參拾肆貫文本券文二通相副、限三永代二東岩蔵寺売渡申所也（以下略）」とある。

〔注17〕『本能寺文書一』所収「永享五年卯二月二日付中明院賢鎮売券」に「永代売放申敷地之事 合四町々者 在所京四至境自二六角以南 四条坊門以北 櫛笥以东 大宮以西在レ之 右件敷地者、東岩蔵寺買得相伝之私領也、雖レ然為二寺興行一如意王丸所望之間、相三副本券文勅裁等 三通并仁売券一通二、限三永代一直銭貳佰陸拾貫文所二売渡 実正也（以下略）」とある。

〔注18〕注14に引用した「宝徳二年十一月廿八日付畠山持国奉書」に記載がある。

- (注19) 引用は『新編国歌大観』による。
- (注20) 引用は『新編国歌大観』による。
- (注21) 金子金治郎「心敬の生活と作品」前編第四章「東国時代」(昭和五七・桜楓社)。
- (注22) 細川家永青文庫叢刊別巻「手鑑」(一九八五・汲古書院)内、通し番号二八一の室町時代書写連歌切による。この点に関しては、岩下紀之氏の論がある(「永青文庫本『手鑑』中の連歌作品について」(愛知淑徳大学論集第十一号・一九八六・三))。
- (注23) 中尾堯「近衛政家の日蓮宗信仰」(豊田武博士古希記念日本中世の政治と文化)(昭和五五・吉川弘文館)。
- (注24) 『草根集』(日次本)の引用は『私家集大成五』(昭和四九・明治書院、永享六年分は『永享六年詠草』(『私家集大成七』(昭和五〇・明治書院)により、私に清濁を付した)。
- (注25) 『東野州閑書』の引用は、『歌論歌学集成第十二巻』(平成一五・三弥井書店)による。
- (注26) 『松下集』の引用は『新編国歌大観』による。
- (注27) 『宇良集』の引用は貴重古典籍叢刊一二『宗祇句集』(昭和五二・角川書店)による。
- (注28) 『七人付判詞』の成立事情は「中世の文学 連歌論集(二)」(昭和五七・三弥井書店)所収、太田武夫氏蔵本『七人付判詞』の木藤才藏氏解説に従う。
- (注29) 『宗祇集』の引用は『新編国歌大観』による。
- (注30) 『長興宿禰記』の引用は『史料纂集 古記録篇一一五』(一九九八・続群書類従完成会)による。
- (注31) 注23に同じ。
- (注32) 辻善之助『日本仏教史 中世篇之四』(昭和二五・岩波書店)。
- (注33) 『本能寺文書』に長享元年十二月廿日の日付の足利義尚御教書「天下安全祈禱事、近日殊可抽懇丹之状如件」が存する(『日蓮宗宗学全書第二十巻』(昭和三五・日蓮宗宗学全書刊行会))。

この解説は、立正大学名誉教授中尾堯氏に参加をいただいた研究会議(平成二二年二月一〇日、於学士会館本館)での討議もふまえたものである。